

世界に通用する紳士たれ



「学校は山の上であり、登下校で鍛えられた」と小原宏貴さん

1919年、実業家の平生鈺三郎(ひらへいさん)1866~1945年)によって創立された甲南学園。中学から大学まで擁し、中高一貫校は男子校だ。ミスノ相談役会長の水野正人さん(73、1962年卒)は中高時代を「自由に好きなことをやらせてくれた」と振り返る。高校時代に打ち込んだボイスカウトで、インターナショナルスクールに通う米国人と交流した。当時はまだ、日米の物質的な格差が大きかった。一緒にキャンプした米国人の友人がガスレンジを使い大きな鍋で食事を作る姿に憧れた。

甲南大学を出て米国の大学に留学。ささいなことで米国人がこまめに助けられた。お礼を言うこと「My pleasure(喜んで)」の返事。「何でも喜んでやる気持ちの大切さを知りました」

2020年東京五輪・パラリンピック招致の最終プレゼンテーションは、水野さんの大きな身ぶり手ぶりのスピーチが話題に。東京の魅力を伝え、招致に貢献した。

「平生先生の教え『常に備えよ』が、私のモットー。良い準備のうえ、最高の本番を迎えてほしい。4年後の東京開催を楽しみにしている。



「個性を伸ばしてもらえた」と水野正人さん

同じく世界を相手に活躍するのが、いけばな小原流の家元、小原宏貴さん(28、2006年卒)だ。3歳のときに亡くなった父も甲南で学んだ。

5月に三重県志摩市であった主要7カ国(G7)首脳会議(伊勢志摩サミット)では、報道陣の拠点となる施設に作品が展示された。卵の殻で作った七つの球体をあしらった作品には、「世界の国々で角のない『和』を実現してほしい」という思いを込めた。

6歳で祖父を亡くし、幼くして家業を継いだ。印象に残る甲南時代の行事は「六甲登山」。全学年の生徒が4時間かけて六甲山(神戸市)を歩く。「部活対抗で競い、走って登山しました。体を鍛えることを徹底する学校でした」と笑う。

教師も個性派ぞろいだった。世界中を旅した社会科の南里章二先生(68)のこんな言葉が忘れられない。「異なる文化の相手と接するとき、語学力より、まず伝えたい気持ちが大大事だ」

イメージの世界が大切な生け花を海外に紹介するとき、日本語から直訳できないこともある。「相手が理解できていなくても、諦めずに伝える。花を愛する気持ちは世界で共通している。花の命と向き合う生け花の心が、異文化の方々には届けばと願っています」

「世界に通用する紳士たれ」という平生の教えが生きる指針となっている。(中塚慧)